

マイエコー，買っちゃいました

橘田綾菜

東京女子医科大学八千代医療センター整形外科

エコーに向かって思わず深くお辞儀をした症例がある。症例は1歳半の男児。「お熱がでて、左腕を使わなくなりました。」と母。よくみると左手が腫れ熱感も強い。採血で炎症反応が高値であり、化膿性手関節炎を疑い穿刺を試みるべきだと判断した。しかし元々肉付きのよい手はさらにパンパンに腫れあがり、どこが関節かわからない。すぐる思いでエコーを当てると、関節包や周囲の軟部組織が腫れていることがわかった。エコーガイド下で関節液を穿刺吸引後、抗生剤投与を開始し緊急手術まで待機することが可能であった。夜遅く院内に整形外科医は自分のみ、成長障害のリスクが頭をよぎる。そんな危機的状況を、エコーが救ってくれた。

マイエコーとの出会いは、2019年初夏の頃である。4月から当大八千代医療センターで小児整形外科外来を開設したが、エコーを常時使用できる環境ではなかった。運動器診療に欠かせないツールであるといわれているエコーだが、小児も同様に、发育性股関節形成不全(乳児股関節脱臼)をはじめとし、さまざまな疾患に使用することができる。すぐエコーを当てることができないストレスに悩まされ、購入へ至った。必要に迫られ購入したエコーであったが、今では、人との出会いを繋げてくれる存在となっている。エコーを中心として、出会う人の輪が広がり、人生がより豊かで楽しくなったように思う。

これまで、長野や千葉、なかでも交通の便が悪い地域での勤務が多く、「車なしでは生きていけない」と周囲から散々言われてきた。

「マイカーよりマイエコー」、この選択を一度も後悔したことはない。車は環境汚染が問題とされているが、エコーはエコなだけでなく、患者さんを笑顔にするのである。

そして、今の私は「エコーなしでは生きていけない。」



写真：エコーと一緒に「ハイ、ポーズ！」
(ご両親の許可を得て掲載しております)